

ルカによる福音書 2 章 1 : - 1 4

そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録せよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へと上って行った。身ごもっていた、いいなずけの MARIA と一緒に登録するためである。ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、MARIA は月が満ちて、初めての子を生み、布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近付き、主の栄光が回りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。『恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう、これがあなたがたのしるしである。』
すると突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。
『いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。』

誰と話をしても、クリスマス話題になる時は、私に語りかけるその人の過去の話になる。それは子供時代の、あるいは幼い子供の親であったことかもしれない。他界した愛する人と共有した思い出のクリスマスであったかもしれない。あるいは、祝う価値がないと思った艱難な時代に祝ったクリスマスであったかもしれない。

物語、困難なときに祝うクリスマス物語は、今日のテーマと類似している。困窮している人々や、今は、あるいは世間の前で祝うことができない人々にとって、イエス誕生の祝報は、元気づけるトニック(tonic)のようなものである。

このような一つの物語がある。それは、私の一つの物語である。

それは午前 8 時であった。食券 (food stamp、アメリカ政府が低所得者に発行する券) 事務所の女性が部屋の鍵を開いて約 20 人を入室させた。この 15 分間にドアの近くで集まっていた人々である。そのグループの一人が私であった。年齢は 28 歳、長い黒髪をして、三才の子供を連れていた。

人々は早くから来ていた。というのも、この3日間に食券の申請あるいは再申請をした人々は、社会福祉指導員(social worker)との予約が許可されていなかったからだ。先着順を基本として対応していたので、私も他の人々のように早くから並んでいた。係の人とできる限り早く面接時間を取るためである。

その係の人は、私たちと一緒に申請書を記入してくれるのだ。

そして私たちが、食券証明書を得る資格があるかを試算してくれる。

この証明書は、各地の食料品店で食料を購入するために使用できるのだ。

それは12月であった。小さな事務所はクリスマスらしい装飾で満ちていた。

受付机から掛かっている蝶結びのプラスチック青葉、壁には切り抜き画の赤い頬をしたサンタクロースが掛けてあった。事務所の隅に、少しゆがんだクリスマスツリーが立っていた。クリスマスツリーは、切り抜き細工の雪片と小さな電球で飾られていた。

とりどりのクリスマス装飾品が飾られていても、事務所は憂鬱な場所であった。

というのも、食料を求めて集まってきた人々で満ちていたからだ。

顔に深いしわが刻み込まれた老人、その顔は「我々は、何度もこの事をしている」と表していた。携帯酸素ボンベ、杖、歩行器を携えた苦しんでいる人々、落ち着きのない、もの憂い^{うれ}な失業した人々であふれていた。

もちろん私はそこにいた。3歳児をかかえた大学卒の既婚女であった。

自分自身は、これは~~仮~~の貧困であり、一時的な不運な状況な理由でこの場に来たのである。これは少しの間^{うれ}に過ぎ去ると信じていた。

小さい動きがあった。受付係が番号を呼んだ。男と女が立上がり、後方の部屋が示された。40分後、この人たちが退出して、次の番号が呼ばれた。

活発で好奇心の強い子供を伴った女、私の目的は単に生存するためだけだった。

娘を楽しませ、なだめ、気をまぎわらせるための、おもちゃ、本、チャリオス(オートミールの入ったシリアル)そしてランチを持ってきた。

私たちは一度に一つずつ、すべてをやり通した。そして再びすべてをやり通した。

しかし子供は落ち着かず、もちろん私も、この場所にとどまるのは心地がよくなかった。

この場所では、自分の運を嫌悪するということは、運がまったくくないことであった。

* (貧乏神に取り付かれる)

おもちゃ、本、チャリオスそしてランチを一度ではなく、2度繰り返した時だった。

事務所に続く外のドアが開き、新たな人が入ってきた。

その人は、フードが上になったジャケットを着た若いアフリカ系アメリカ人であった。顔を見ることは難しかった。彼女のすぐ後に、もう一人の女性が入室した。その女性は彼女より年配で、下方になにかを握っていた。それは乳母車であった。その中には、人のような何かが、厚着をして、毛布で包くるまれていた。誰なのかは、まったく見えなかった。

二人は着席するためにコートのファスナーを開あけ始めた。顔の作りが似ていることから、母と子に間違いはなかった。二人とも頬骨が高く、たくましく、誇り高い顔をしていた。二人とも待合室にいる人たちと目を合わせなかった。乳母車のなかは何なのか、誰であるのか、人々の関心は、なかなか明かされないこの状況に向けられていた。

この状況に反応したのか、小さな待合室は眠りから醒め、生き返った。二人の女性の隣に座り、退屈していた若者は、乳母車とダイパー袋の場所を空けるため自分の持ち物を動かした。携帯酸素ボンベを持った中年女性は、自分の番号を手を持って2時間近く目を閉じていたが、目を開ひらき、赤ん坊の毛布が取り去られるのを見ていた。杖をもった年配の男性は、部屋の隅の冷水器に向かって歩き始めた。それは間違いなく、一目見たかったのだ。私の落ち着きのない子供は、自分のしていることを止めてしまった。そして静かに赤ん坊を見つめた。赤ん坊が現れるの期待していたのだ。

現れたのは、男の子であった。1枚、2枚、3枚と毛布が剥された。男の子が着せられていた小さな上着が脱がされ、小さなフードのあるつなぎが脱がされた。現れたのは、濃いコーヒー色の肌で、髪の毛が生えそろった小さな乳飲み子であった。完べきな小さな男の子！

その時だった。受付係、番号係、守衛、みんながソーシャル・ワーカーを呼びに行った。受付係は椅子より立上がった。そして二人の女性の方へ歩いて行き、赤ちゃんを覗いた。「まあー、見てよ」と彼女は言った。「なんてこの小さなきれいな男の子…、幼子イエス様が今年は早くお見えになったみたい！」

これは私の三才児の娘が必要としていたすべてであった。娘は大きな声で尋ねた。「幼子イエスなの？」
部屋中は爆笑であふれた。それともある人は、喜びの声を上げたのだろうか？

私にとって、その質問は宙に浮いていた。「これは幼子イエスなのか？」

「そうだ！」と私は言った。「そうなのだ！」

マリアとジョセフの貧しい家庭に誕生した神の物語は、神の喜びの到来であり、貧しく、困窮している人の上に授けられたことだったと言える。

誕生の重要性を深く理解する人々と、私たちの体^{からだ}をもった神の贈り物は、私たちが持っている体以上のものであるとする人々がいる。これらは両方とも正しいと言える。

* (イエスは私たちと同じ人間であるが、同時に神聖を宿しているという意味で違う)

今夜、私は話そう。私たちに、すべての私たちに、誕生された神の物語である。

神聖さと聖霊さをたやすく失うこの世のために与えられた神の尽きない愛の物語である。

神の愛は、心の中で生きており、息をしており、明るく燃えている。

従って人生において、私たちがすでに関わっている大感染も、正義への戦いも、

私たちの中で、私たちの回りで続いてゆく。

私はこのことも述べよう。私たちへ招待状とは、神聖さと聖霊さを探し求めることである。

それは一年に一度ではなく、何度も何度もやって来るのだ。

それは生まれたばかりの幼子のように、新鮮で、希望と可能性の喜びに満ちている。

私たちが愛する人々のために、暗く絶望した世の中のために。

「その子は、幼子イエス様なの？」と多くの子供たちのように、私の娘は尋ねた。

大人が予期しない場所、時間に、自分の目の前で幼子を注視していた。

幼子、聖なる子は、今夜、私たちの側^{そば}に生きておられ、

私たちの真正面に生きておられ、私たちの深い心の中に生きておられる。

希望に備えよう、可能性に備えよう、喜びに備えよう。

それは私たちと世界が必要としている。

(文責長澤猛)